

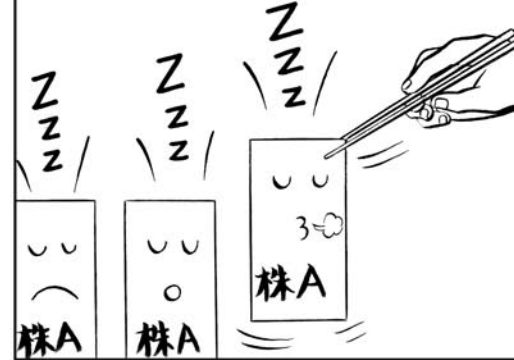
第2章 理解のための用語解説



成長株の初期の段階は
小型株であることが多い
のですが
投資信託のような
プロの機関投資家が
小型株を買う場合
ファンドの規模に見合った
株数を手当てするには
相当な日数がかかります



株価を上げない
ように
静かに何日にも
わたって
ひとつの
銘柄を
買い続けて
行かねば
なりません



するとそこでは
どういうことが
起こるかという
株価はある一定の水
準からあまり値段が
下がらなくなります



株価が横ばいの状態を
オニールは
「ベース」と
呼んでいます

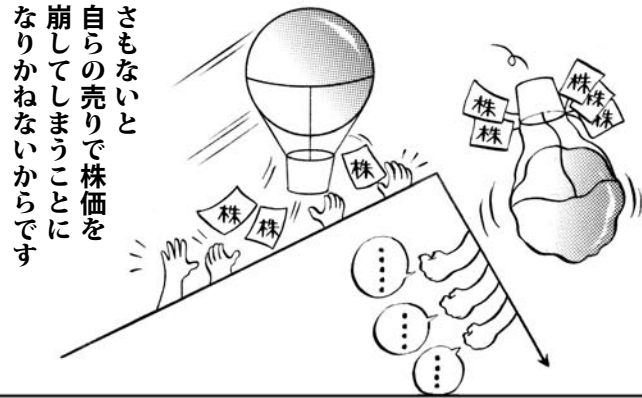
そのようなときに
その銘柄には
アキュムレーション
(プロによる買い集め)が
起きていると
表現しています
概してその後
株価が大きく
上昇するとみているのです



この反対が
「ディストリビューション」
です
これは「プロによる株式の
売り抜け」のことで
こういう状況が起きている
ときをいかに早く察知するか
これをオニールは非常に
重要視しています



プロが保有株を
売却する場合
大量の株数を市場で
さばくには上昇エネルギー
が沸騰しているときに
売り抜けなければなりません



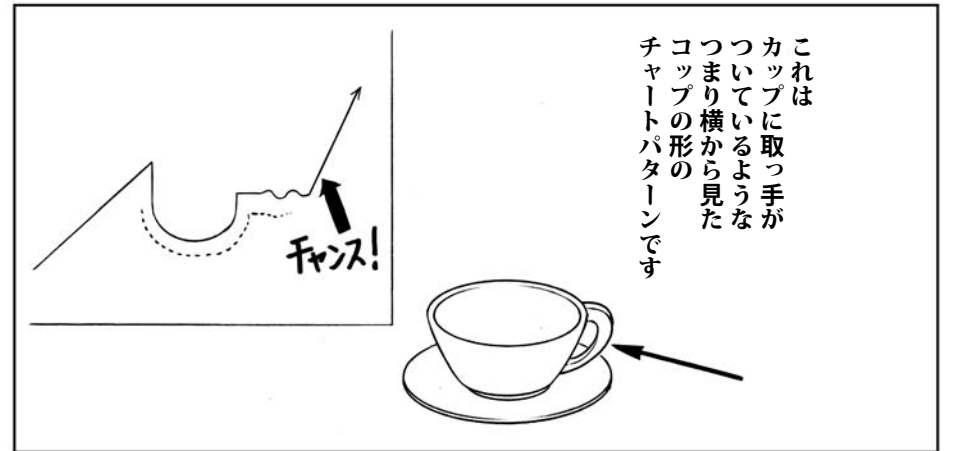
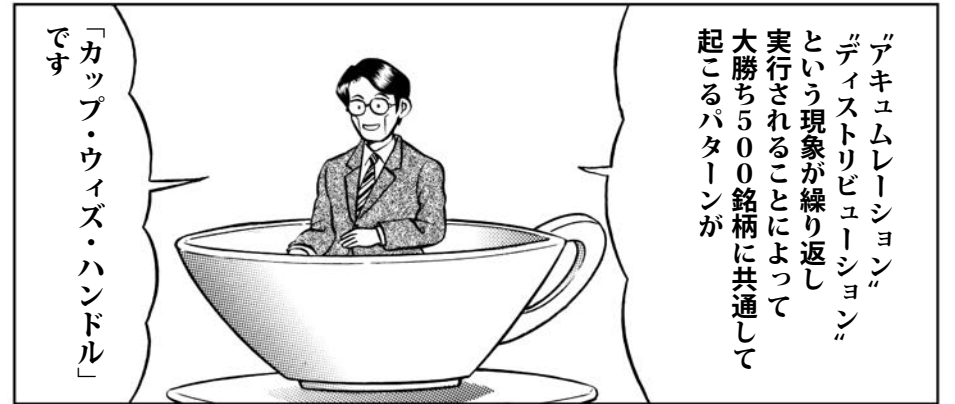
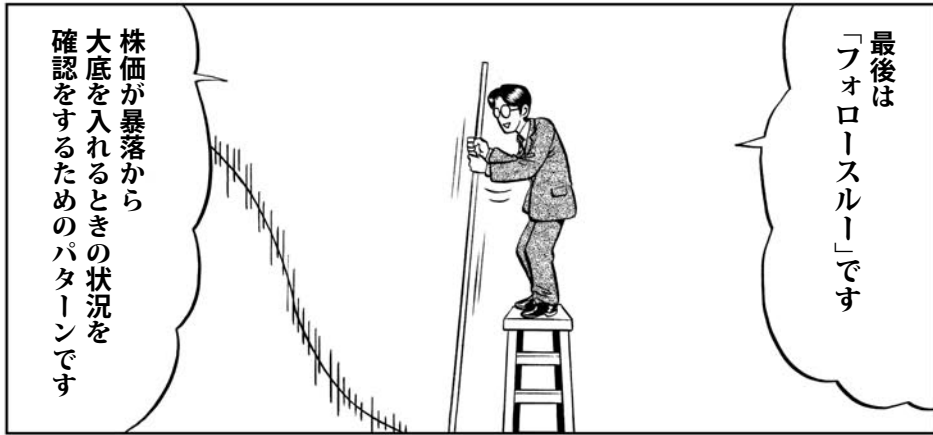
さもないと
自らの売りで株価を
崩してしまうことに
なりかねないからです

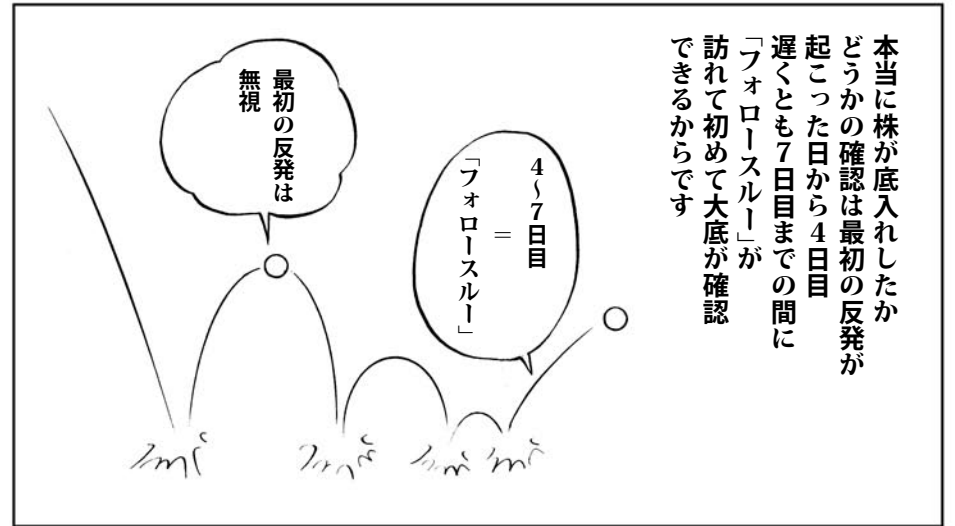
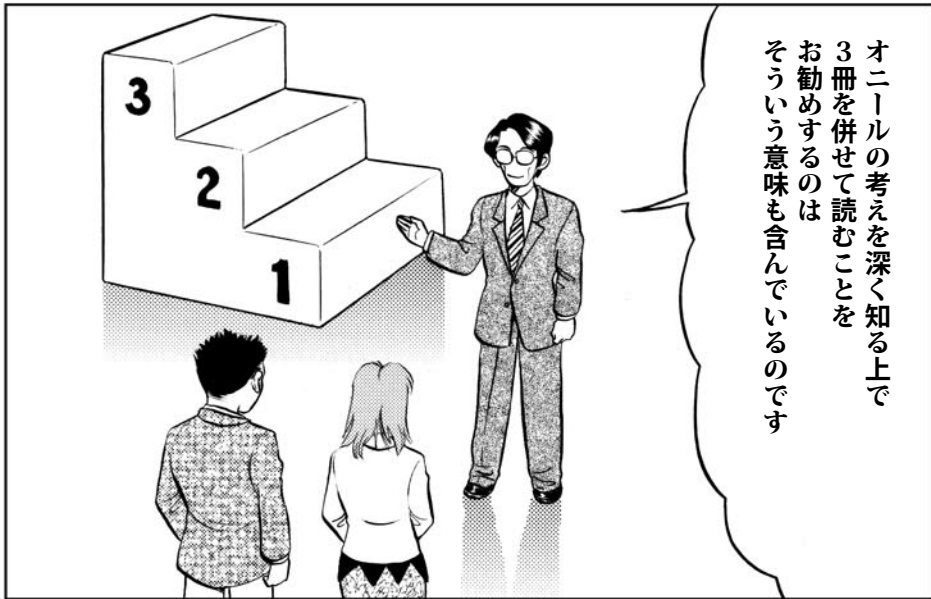
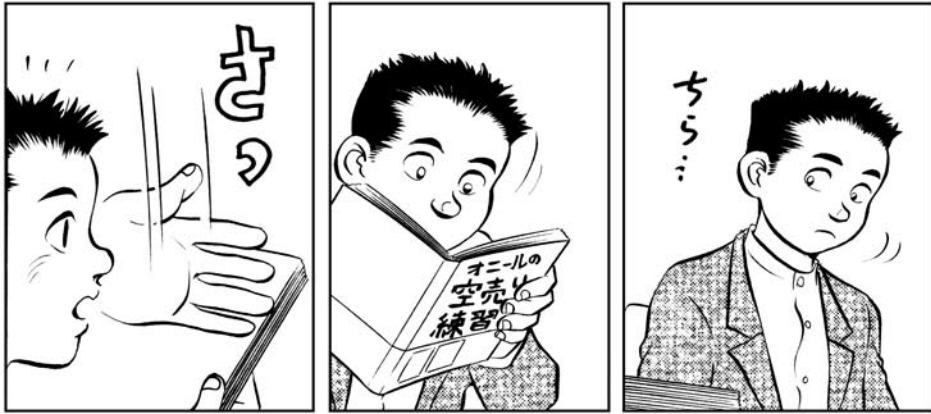
ある銘柄が何日にもわたって
上昇を続けてきた最終局面で
大量の出来高を伴って
いるのに株価がそれ以上は
上がらなくなる状態があります

これをオニールは
「ディストリビューション」
と表現しています

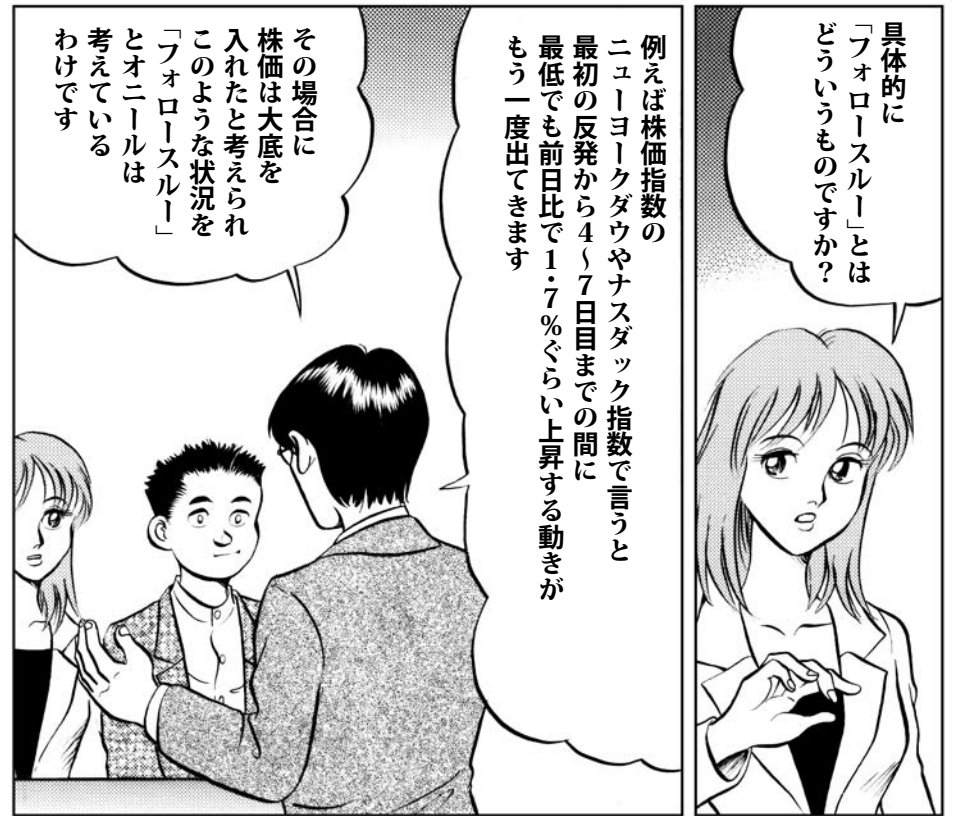


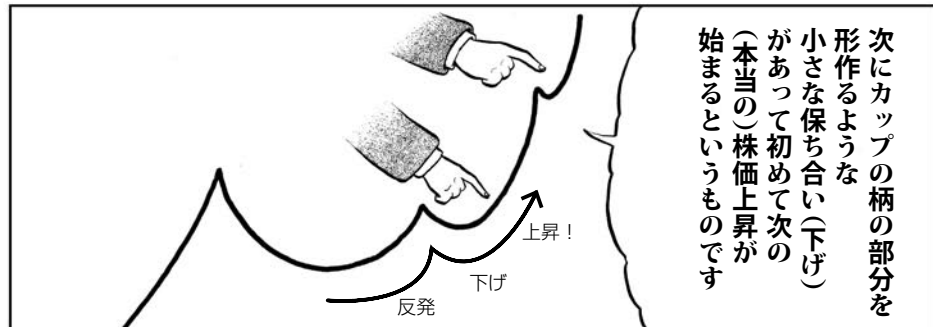
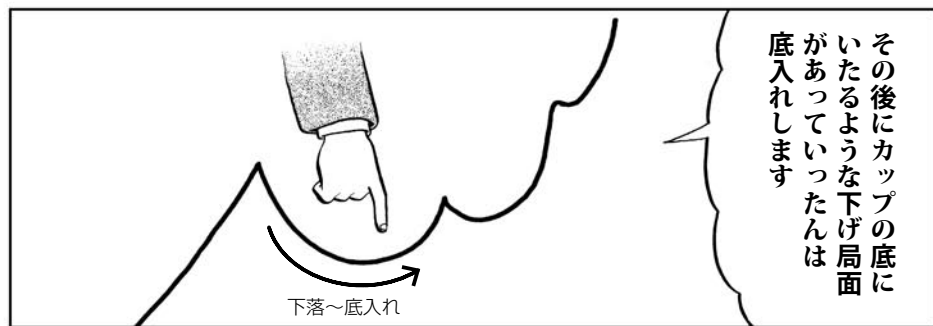
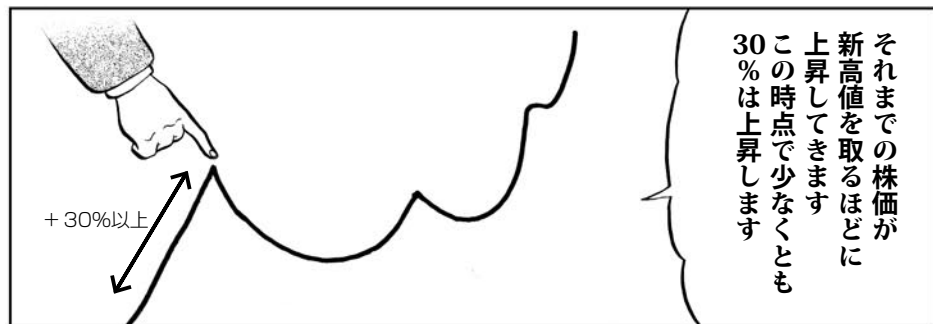
機関投資家による
売り抜けが
背後にあるために
その銘柄は
早晚天井をつける
というわけです

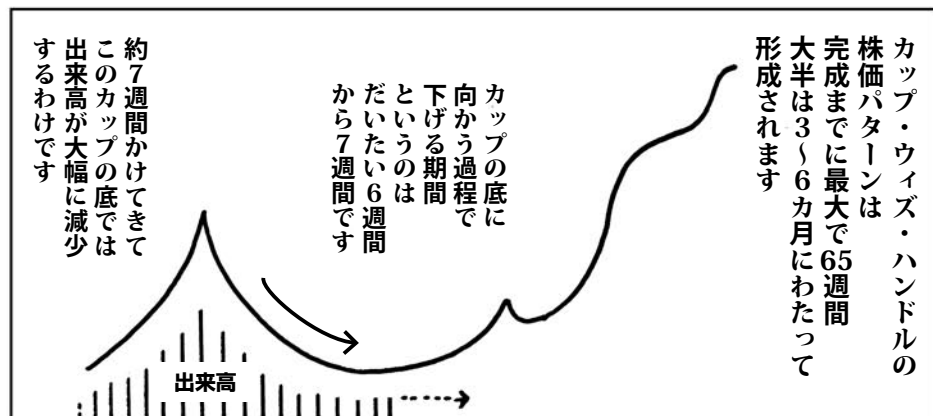
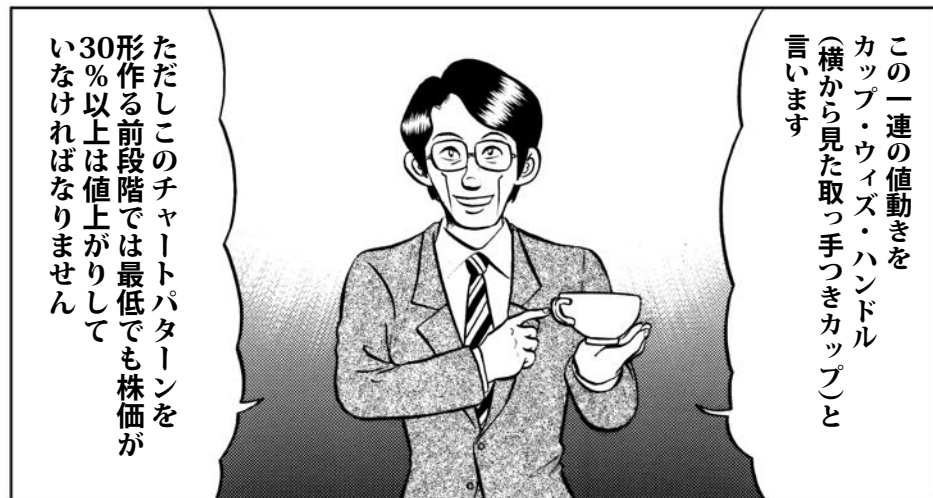
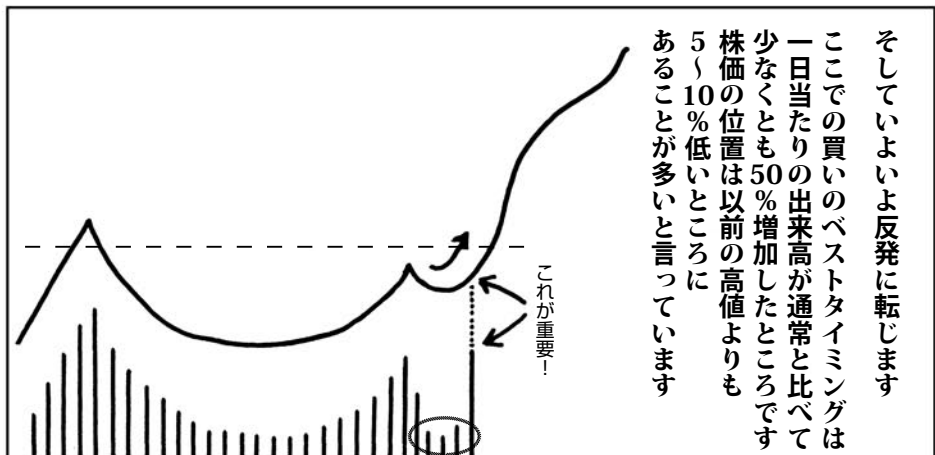
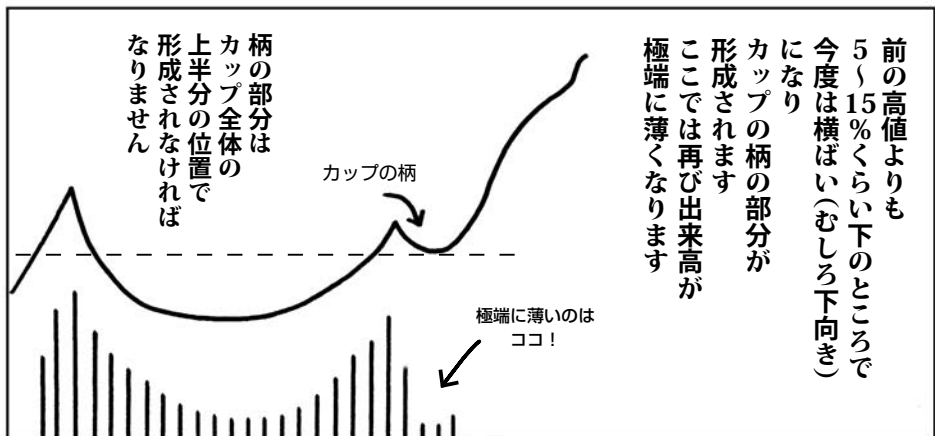
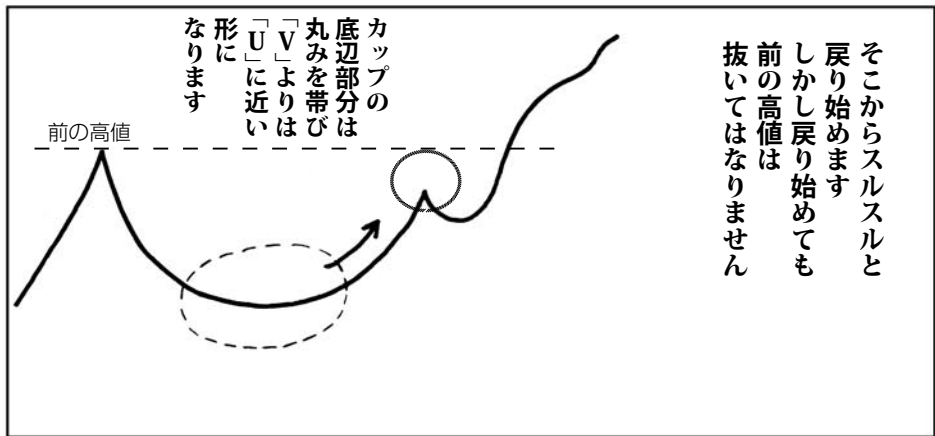




本当に株が底入れしたかどうかの確認は最初の反発が起った日から4日目遅くとも7日目までの間に「フォロースルー」が訪れて初めて大底が確認できるからです

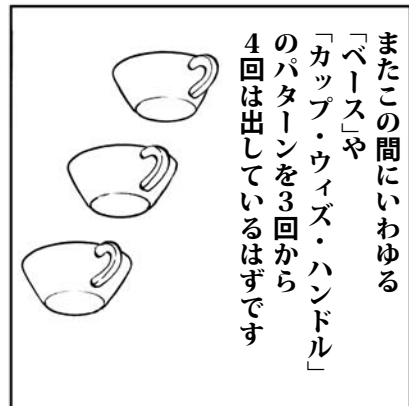
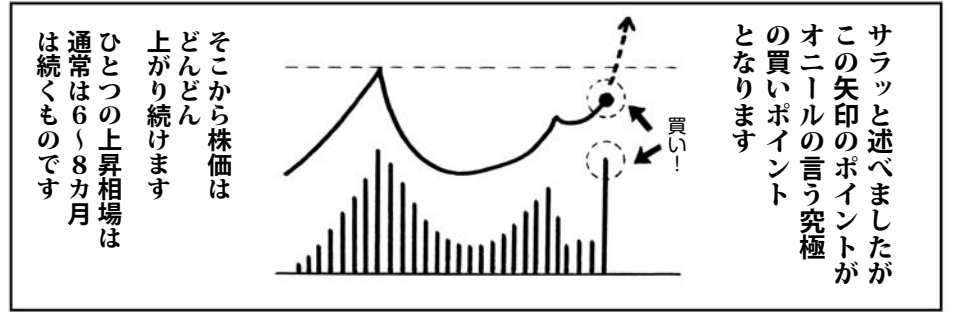
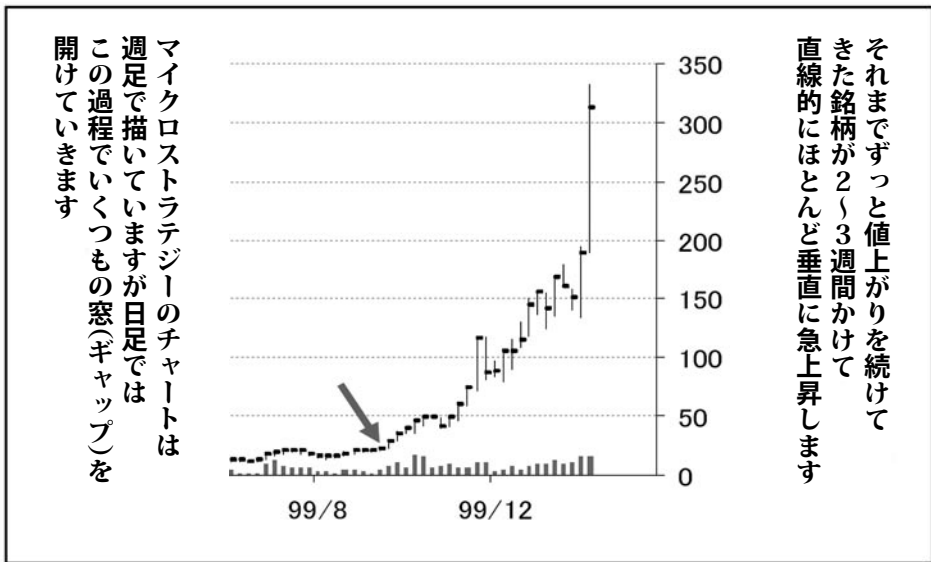








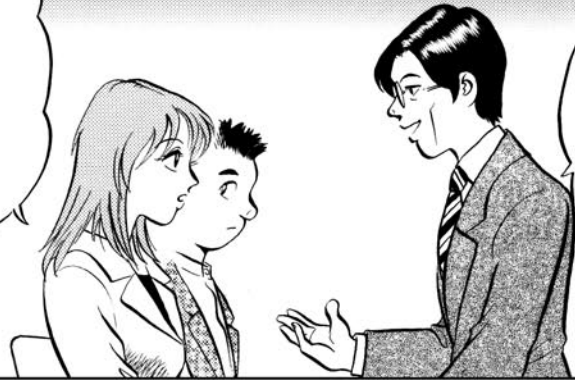
次に成長株を
どこで売るかという
ことですが
これは
成長株の天井圏で
典型的に現れる
「クライマックスストップ」
を探していくことに
なります



第3章 CAN-SLIM

さてここからは
「CAN-SLIM」の
説明に入ります

キャン—スリム：
これもチャートの
パターンですか？

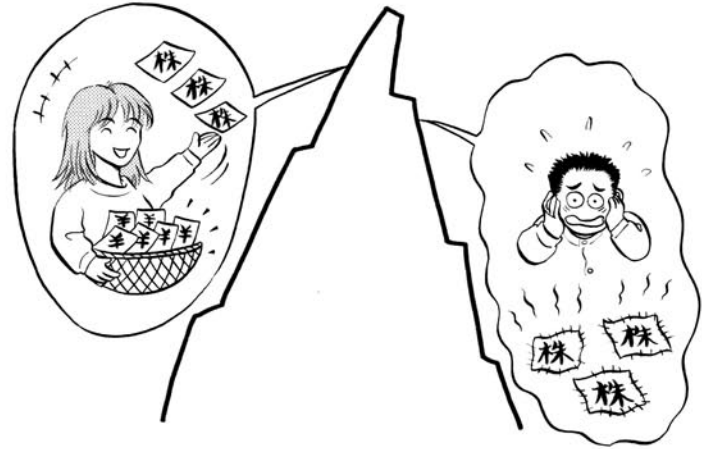


「CAN-SLIM」とは
50年間で大勝ちを収めた
500銘柄に共通する項目
つまり成長株のエッセンスは
七つあるということです

その七つの頭文字を
取ったのが
「CAN-SLIM」です
ここからは大化け銘柄の
ファンダメンタルの説明に
入ります

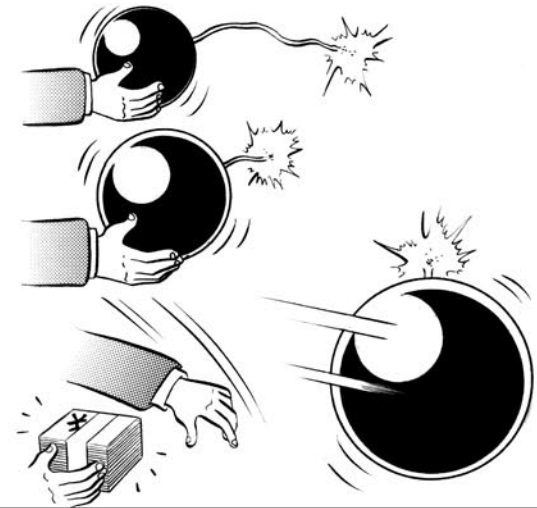


このような動きを示す株価は
そういうギャップをあける
過程で売り抜けないと
下がり始めてからはもう
売ろうにも売れません



クライマックスストップを
発見したあとは
果敢に売り抜けるだけです

そこまで
保有し続けるという点が
オニールのすごいところですが



著書のなかでは
これら一連の
行動を
淡々と説明して
いるところに
もっと
すごみを感じます

